

乳幼児期の化膿性肩関節炎の後遺症としてみられる上腕骨短縮と下方亜脱臼

背景

乳幼児期化膿性肩関節炎の後遺障害として上腕骨の短縮がみられることは既に報告されているが、上腕骨の短縮に起因する肩関節機能障害についてはまだ明らかになっていない。本研究において、我々は乳幼児期化膿性肩関節炎の長期成績を後ろ向き調査し、上腕骨の成長障害と肩甲上腕関節の不安定性に関連する可動域低下の関係について検討を行った。

方法

生後数日から2.6歳までに発症し、5.0年から17.9年経過観察された15例16肩を対象とした。初期治療の方法、最終診察時の上腕骨長、肩関節機能について調査を行った。最終治療成績は、単純レントゲン検査で評価し、異常のないものをグレード1、上腕骨頭の変形があるものをグレード2、上腕骨頭の変形に加えて下方亜脱臼のあるものをグレード3とした。

結果

初期治療として10例で関節切開が行われた。発症後手術までの期間は3日から26日であった。最終診察時グレード1は5肩、グレード2は6肩、グレード3は5肩であった。上腕骨短縮はグレード1で平均0.1cm、グレード2で平均0.9cm、グレード3で平均7.3cmであった。グレード3はすべての例で3cm以上の短縮を認め、5例中4例で130度以下の挙上制限を認めた。グレード3で発症後10日以内に関節切開を受けていた症例はなかった。

結論

幼少期の化膿性関節炎に起因する肩機能障害を伴う上腕骨頭の下方亜脱臼は、3cm以上の上腕骨短縮に伴ってみられた。これは発症後10日以内に関節切開が行われなかった患者に限ってみられた。